

谷崎潤一郎「細雪」論

— 目的としての「語り」 —

高 間 文 香

はじめに

谷崎潤一郎の作品において「細雪」ほど問題点を多く含んだものはなく、これまで様々な観点から研究されてきた。その中でも近年注目されているのは、「語り」をめぐる問題であろう。「細雪」は近代小説の中にあつて、独特な「語り」の方法を用いた作品である。その特徴について中村真一郎は次のように述べている。

此の小説で、雪子は最も主要人物であるにもかかわらず、その心理が描かれるのは、実に下巻の第六章になつてからで、それまでは悉く周囲の人たち（就中、もう一人の主人公である幸子の）想像といふ形で描写される。読者はさまざま雪子の事件に対する反応を、その人物の内側に入つて聞かされることがない。そのやうな方法で主役が描かれると言うことは、恐らく、他の小説には類がない。

中村はこのように述べ、「細雪」における語りの方法を「側写法」と名づけた。一方、東郷克美は「この作品には潜在的な語り手の存在が

認められる」と、語り手の存在を明確にした上で、「物語の大半は芦屋の蒔岡分家の主婦である次女幸子の視点から語られる」とその語りの特徴を指摘した。東郷が「潜在的」と言い表したような語り手の実態を明らかにしたが平野芳信⁽³⁾である。平野は「細雪」の語り手を「介在者」とし、（肉体化された作中人物の内面にたちいらす、かといつて三人称の全知的客観的視点からでもなく、常にその場面で第三者的立場にいる作中人物の眼と声を借りて—あるいは重なつて—、そのエピソードの中心人物の行動を描写したり心理を付度している）と分析した。この平野の分析は「細雪」における語り手の在り方を的確に言い表していると言えるだろう。

以上、「語り」についての先行研究の概要を見ただけでも「細雪」の「語り」の特異性が窺われ、またこれまでの研究で一定の成果が挙げられていることが認められる。しかし、その独特の「語り」が物語内容に及ぼす影響についてはまだ考察の余地があると考えられる。谷崎はその生涯において「語り」の方法を模索し続けた作家であると言つてよいが、その模索が何のためであつたかを忘れてはならない。「細雪」における「語り」の考察は、「語り」と「語られるもの」の関係を追及しなければならぬのである。

佐藤淳一は「谷崎を論ずるにあたって必要なのは、表現方法と表現対象とを一体のものとして捉える視座である」と述べ、「細雪」における語りと生島遼一らが批判した「細雪」の通俗性の関連を考察している。これは長く批判されてきた「月並の美学」に対する新たな視点からの反論という点と、従来単独で考察が行われてきた「語り」と「語られるもの」を結び付けたという点で看過してはならない論である。しかし、谷崎の作品全体を捉えるための一要素として「細雪」を考える時、「語られるもの」として第一に考えなければならないのは、登場人物である女性たちであろう。谷崎は作品において常に理想の女性を追い求め、それに拝跪してきた。谷崎の文学を貫くテーマとはマゾヒズム的欲望による、一種のエゴイズムともいえるべき「女性崇拜」である。谷崎の作品における「語り」とは、跪くべき女性を表現する手段であった。「語り」の目的を見ると、「語られるもの」である女性たちの存在は無視できない。

「女性崇拜」という観点から見ると、「細雪」は異色の存在である。谷崎の作品に特徴的な妖婦が出てくるわけでもなく、崇拜されるべき女性がいるわけでもない。また語りの方法も一人称ではなく三人称を採用しており、一見すると特に特徴がない作品であるかのようにも思える。ではこの作品は一体どのような語りで何が語られているのだろうか。本論では、「細雪」独特の「語り」の方法と、その「語り」が「語られるもの」に与える影響とを考察していき、「細雪」の特徴を明らかにしたい。

一、「細雪」の語りの特徴―会話文の挿入

最初に「細雪」における語りの特徴を見ていきたい。「細雪」の語りの大きな特徴の一つとして、地の文の中に作中人物の会話や手紙の内容が織り込まれ、さらに作中人物たちの心内描写までもが紛れ込むという点が挙げられる。会話文の挿入は、括弧付きの会話文の括弧を取り除いただけのものもあるが、「細雪」に特徴的なものとして、例えば次のような例が挙げられる。

貞之助もそれを気にして、雪子ちゃんが此方に泊まつてゐるのはよいとしても、自分達親子三人の関係の中へ割り込んで来られるのは面白くないから、悦子との間をもう少し遠ざけたらどうであらうか、悦子がお前を疎んじて雪子ちゃんを慕ふやうになつたら困る、と云つたことがあつたが、幸子に云はせると、それは貞之助の思ひ過(ご)しで、悦子はあゝ見えて子供相応に如才ないところがあつた、雪子に甘えてはゐるけれども、本心は矢張りあたしを一番好いてもゐるし、何かの場合私に縋り着かなければ駄目だと云ふことも、結局姉ちゃんはお嫁に行くべき人だと云ふことも知つてゐる、(中略)極端に云へば身の置き所もないやうな境涯なのだから、あたしとしてはあの人(あの人)が可哀さうでならない、それで悦子に雪子ちゃんの孤独を慰める玩具の役をさせてあるのだ、と云ふのであつた。

(傍線引用者・以下同様 上六)

この部分では、地の文に貞之助の言葉と幸子の言葉が織り込まれてい

る。「雪子ちゃんが此方に・・・雪子ちゃんを慕ふやうになつたら困る」までははつきりと貞之助が発した言葉であることは分かるが、その次の表現から「細雪」の語りの特徴をよく表している。幸子が実際に貞之助に対して発した言葉なのか、または幸子の心中語であるのか、はつきりとは分からないようになってくる点に加え、「幸子に云はせると」は語り手の言葉であると判断できるが、それ以下の「それは貞之助の思ひ過ごしで・・・雪子に甘えてはゐるけれども」は幸子の言葉なのか、語り手の言葉なのか、区別がつかないようになってくるのである。

ここで幸子と語り手の言葉の境界が分別不可能になっている根底には、「細雪」の語りの大きな特徴が関係している。この文章はそもそも間接話法なのか、直接話法なのかが判然としない。間接話法であれば「雪子ちゃん」「こいさん」などの呼称は使わないであろうし、直接話法であれば作中人物である幸子と貞之助の言葉は呼称も含めてすべて関西弁で書かれなければならないだろう。しかしここでは、呼称は直接話法的でありながら、文章自体は間接話法的であるといった形式を取っている。つまり語り手は、標準語で語りながらも幸子の視点に立つて「雪子ちゃん」や「こいさん」といった呼称を使うと語り、言わば反則的な語りの方法を使用しているのである。

これらを踏まえ、先の引用文に戻ってみる。問題となつている「それは貞之助の思ひ過ごしで・・・雪子に甘えてはゐるけれども」の部分は、読点で区切ると①「それは貞之助の思ひ過ごしで、」②「悦子はあゝ見えて子供相応に如才ないところがあり、」③「雪子に甘えてはゐるけれども、」の三つに分けられる。この三箇所の呼称は「貞之

助」「悦子」「雪子」と、三人称的な表現になつているため、語り手の言葉と考えるのが一番妥当である。しかし、③「雪子に甘えてゐるけれども、」の後に「本心は矢張りあたしを一番好いてもゐるし、」という幸子の一人称での文章が続くため、③が幸子の言葉と考えられ、ひいては②も、そして①も幸子の言葉と捉えることが可能になつてくるのである。三人称的な呼称の使用も幸子の心中語であるとすれば許容できる範囲であり、大きく括れば「幸子に云はせると」以下は幸子の言葉とすることも可能になる。文章としての区切りを考え合わせると、問題となつている三箇所で語り手の言葉として差し支えないのは、①「それは貞之助の思ひ過ごしで、」のみと言える。ここでは、登場人物が使う呼称を地の文に取り入れることで、地の文の中にも関わらず、登場人物が会話を繰り返しているかのような語りを作り出すことに成功しているのである。

平野芳信⁽⁷⁾は前掲の論文において、このような地の文に挿入された会話文について次のように述べている。

このようなある登場人物の声に重ねられた別の作中人物の言葉は、いわば括弧でくくられた直接話法としての関西弁の文字化された会話文と、括弧を省略した間接話法による話者の中継としての「地の文」との中間の形態にあるといつてよいものである。

西洋語の概念でいえば、「自由間接話法」に相当するといつてもよい。この時、井谷のように共通語（標準語）で話す人物の場合には見落とされがちだが、蒔岡の姉妹のように関西言葉を常時使う人物の場合、直接話法による会話文は関西言葉で表記されている

ため、関西語独特のイントネーションが読者の耳に残響するのである。そしてたとえそれが、括弧を外されただけの自由間接話法的な場合でも、あるいは間接話法化され字面で完全に共通語化されて記述されても、同様の効果をもたらすものと考えられる。

このように平野は、地の文に織り込まれた登場人物たちの言葉が、あたかも直接話法のように聞こえてくる原因を、直接話法で書かれた会話のイントネーションが読者の耳に残っているためであるとしている。確かに平野の言うように蒔岡姉妹には関西人であるという大前提がある。「細雪」冒頭の「こいさん、頼むわ。——」（上二）という幸子の言葉は、関西弁の強烈な印象を読者に与える。それにより「細雪」は、蒔岡姉妹の会話文においては関西弁のイントネーションが自然と想起される仕組みになっている。会話文が地の文に挿入される場合に、文が切れず、読点で長々と続けられているのも、その効果を狙ったことであろう。

しかしそれ以上に、ここには前述したような、呼称という大きな仕掛けがある。ロナルド・ウオード著『社会言語学入門』に拠ると、「他人への呼びかけにどんな要素が含まれるかを考えると、様々な種類の社会的要素——特定の状況、相手の社会的地位、または階層、性別、年令、家族関係、職場の階層関係、対話の種類（例えば、サーブिसを受けるような場合、医師と患者の関係、牧師と告白者の関係など）、人種、親しさの度合いなど——が我々の選択に関わっている」。このように呼称には、使う人の立場や、呼びかける人との力関係などが反映される。端的に表せば、個人の人間関係が内包された言葉であると

えるだろう。

これを踏まえ、「細雪」の語り手の問題に返ってみる。ここでは第三者とも言うべき語り手が、本来登場人物が使用すべき呼称を使っている。これは呼称に内包された人間関係をそのまま利用した形で、語り手が「語り」を展開していると言える。これにより「語り手」は、登場人物たちの会話を標準語でありながらリアルに表現することを可能にしているのである。

また、登場人物たちが使う呼称を利用するということは、語り手が三人称の視点を離れ、登場人物たちの視点に立つということも意味している。このような意味において、語り手の使う呼称は一人称的な語りの在り方と考えられる。つまり「細雪」では登場人物の会話文を地の文に取り込む場合、三人称の語り手があえて一人称的な視点に立つ。そして呼称を効果的に使用することで、語り手の「語り」でありながら、あたかも登場人物自身の会話文であるような語りを成立させているのである。

このような独特な語りの方法は、「細雪」のなかにかくも見られる。基本的に三人称的立場をとっている語り手が、一人称的な表現である呼称を自在に操る。このような語りの方法はどのように考えればよいだろうか。

そもそも、物語において会話文とは、語り手による「引用」である。ジュネット⁽⁶⁾は会話を「再現された言説」とし、「語り手は作中人物に、文字通り言葉〔発言権〕を譲渡するかにみせかける」表現であるとしている。言い換えるならば、登場人物たちが表現の主体にいるように見える会話文も、その背後には会話を引用している語り手の存在があ

るということになる。つまり、括弧付きの会話文も元をたどれば語り手の統率の中にある「引用」なのである。

これを踏まえれば、「細雪」冒頭の「こいさん、頼むわ——」などの会話文と、前出したような、地の文に挿入されている会話文との差とは、簡単に言えば、語り手の存在が前にでているか否かの差であるということになる。そして括弧付きの会話文という形でなく、あえて地の文に会話文が挿入されているところに「細雪」の特徴があると見える。

「細雪」の語りでは、語り手の統率がより表面化している地の文に会話文が織り込んであり、さらに標準語で語り手の編集が加えられている。これは語り手の統率を強く意識した方法と考えていいだろう。つまり、本来ならば語り手が後方に下がり、作中人物が前に出てくるはずである会話文を地の文に挿入することで、語り手が登場人物の後ろに隠れることを、拒否していると考えられるのである。しかも「細雪」の語り手は呼称を使い、一人称的な立場をとることにより、登場人物が前面に出てくることをも同時に容認する。これにより語り手は登場人物と共に語ることに成功しているのである。

平野芳信⁽¹⁾はこのような語りを「叙述の主体を重複させる」方法とし、「多声的なテキスト」と呼んだ。「細雪」の語りには、語り手の声が作中人物の声と重ねられ、語り手の声と作中人物の声が同時に響いてくるような、まさに「多声的」な語りとなっている。しかし「多声的なテキスト」とは、言い換えれば、いつでもどこかで語り手の声が入っているテキストとも言える。また、先ほども述べたように、会話文も結局は語り手の引用である。よって「細雪」のテキストが「多声的」に見

えるのは、語り手が登場人物たちを仮装するからであり、それにより語り手がテキストを「多声的」に見せているのである。

「細雪」の語り手は時に登場人物の視点で呼称を使い、会話文を地の文に挿入する。これにより本来登場人物たちが強く前に現れる会話を、語り手の強い統率の中に閉じこめてしまっているのである。

このように、「細雪」における語り手は、まるで語り手による一人芝居のように強い存在感をもって物語全体を統率しているのである。

二、「細雪」の語りの特徴―視点人物・幸子の影響

「細雪」の語りにおけるもう一つの特徴は、視点人物に幸子が選ばれているという点である。もちろん、幸子のみを視点人物として採用しているわけではないが、他の作中人物に比べ、幸子が選ばれている場合が圧倒的に多い。

「細雪」では語り手が大きな権力を持っているということは、前節において明らかにした。そのような語り手に視点人物に選ばれるということは、その人物が作品全体に大きな影響を持ち得るということでもある。では幸子を視点人物にすることで、一体どのような効果があったのだろうか。ここでは前述したような強い統率力を持つ語り手と、視点人物・幸子の関係を考察していきたい。

東郷克美⁽¹⁾は視点人物が幸子であることによる物語全体への影響を「物語全体が幸子という、やや感傷的だがごく常識的で家族思いの中流家庭婦人の感性の膜で覆われることになる。」と指摘している。東郷の指摘するように、幸子という、「善良な」「中流家庭婦人」を視点

人物に設定することにより、「細雪」は一種閉鎖的で、社会から隔絶された独特の世界観を作り出している。その世界観の中では、雪子は「因循姑息」な性格が肯定的に評価され、妙子の発展的な性格は「異端児」として否定的に評価されるのである。このような影響は幸子が視点人物となった結果として物語全体にもたらされる。しかしいくら幸子自身の価値観が物語を覆っていると言つても、「細雪」は幸子の一人称小説ではない。幸子の「感性」を前面に出すのであれば「痴人の愛」のような一人称が効果的であると考えられるが、あくまで三人称の語りを採用しているところが「細雪」の特徴なのである。これは逆に考えれば、東郷の指摘するような影響——幸子の「感性の膜で」物語が「覆われる」——は、結局は「細雪」の語りにおける副産物であるということにもなる。幸子が語り手でなく視点人物として選ばれた背景には、幸子の「感性」で物語を覆うこと以上の狙いがあったのである。

結論から言えば、幸子を視点人物にすることもたらされる第一の効果とは、他の作中人物に対する情報量の差である。「細雪」では、様々な情報が幸子のもとに集まり、語り手は幸子にもたらされた現在や過去の情報を紹介するかたちで物語を展開させていく。この幸子と語り手の情報の共有が、物語の展開や登場人物たちの描写に大きな影響を与えている。なぜならば、雪子や妙子に対する幸子の評価には二人の「情報」が不可欠となってくるからである。つまり、語り手が幸子の「視点」を共有することが、雪子と妙子の描写に、ひいては読者に与える印象に大きく影響しているのである。次に、語り手と幸子の情報共有の実態を見ていく。

「細雪」では雪子の縁談と妙子の恋愛騒動が大きな軸として描かれている。雪子の縁談では相手の家柄や財産、人柄などに加え、お見合いの一部始終が詳細に語られるのに対し、妙子の恋愛騒動になると、本当の相手是谁であるのかさえも曖昧であり、常に最後に予想外の展開を見せられることになる。

この雪子と妙子の情報量の違いは、結局は視点人物が幸子にあるということに由来している。幸子は雪子の縁談を積極的に推し進める立場におり、また長女の鶴子が東京にいることからもお見合いに同席する機会が多い。それに対し妙子は、仕事場としてアパートを借りたり、洋裁学校に通ったり、果ては勘当されたりと、幸子の目の届かない所に行つてしまう傾向にある。そのためにも幸子は妙子に関する細かな情報をあまり多くは持てない。よつて妙子自身による「告白」を待つか、奥畑などからの「密告」を受けるかしなければ妙子の恋愛については幸子は知りようがないのである。

では雪子に関する情報なら幸子は豊富に持っているのかというところでもない。雪子に関してはあくまで縁談に限って幸子は総てを把握しているのであり、雪子の心理となると、長年の姉妹としての経験から推測するしかない、という状況である。

このような雪子の情報量をほとんどそのまま共有しているのが「細雪」の語り手と言える。そもそも小説において、語り手は特権的な位置にあり、「全知」という立場を選ぶこともできる存在である。しかし「細雪」の語り手はその権利をあえて放棄し、あくまでも「声屋の家」を本拠地とし、またそこからほとんど移動しない幸子に視点を含ませ、それにより得られる情報をも共有するのである。

このような語り手の情報量の偏りが、幸子を視点人物におくこと最大の影響であると考えられるのであるが、語り手と幸子の情報共有は、単にその量に留まらず、情報入手の順序までも同じくしている。それは妙子の例に顕著である。

そして、さう云へば又、毎月相当の稼ぎ高があるとは云ふものゝ、一方で貯金をしながら一方では洋服に最新の流行を追ひ、装身具などにも可成りの贅を尽くしてゐる妙子の遺線の巧さには、どうしたらあゝやれるものかと、幸子は毎々感心してゐるのであつたが、(幸子は彼女の頸飾とか指輪の中には、奥畑貴金属店の陳列棚から出た物もあるのではないかと、密かに疑つたこともあつた) お金の有難さをしみづく知つてゐることに於いても、四人のうちで妙子が出色だつたであらう。(中二十四)

ここでは幸子の妙子への考えが語り手によつて説明されているが、傍点部は語り手の付記である。この後に幸子の疑い通り、妙子が奥畑に「奥畑貴金属店の陳列棚」から貰がせていたことが発覚するのであるが、ここでは「密かに疑つたこともあつた」とされるだけで深くは追求されていない。実際に「奥畑貴金属店」から貰がせていたことが明かされるのは、幸子はその事実を知るまで待たれている。

妙子は近頃は、常にも和服を着てゐることが多いのであつた。彼女は脚の線が綺麗なので、洋服であると、却つて少女じみた可愛らしさが感じられるのであつたが、和服だと脚の長所が隠される

ので、変にぶんぐりむつくりしてゐた。それは一つには、病後あんなり慾張つて滋養分を取り過ぎたゝめ、病後以前より太つたせゐでもあるらしかつたが、でも当人に云はせると、自分は元來足が熱するたちであつたのに、あの大病をしてからは、どう云ふものか洋服を着ると足が冷えてかなはない、と云ふのであつた。(下二十八)

この引用文の時点では、妙子は実は妊娠している。しかしこの引用の前後では、病氣以前より妙子が太つたことがくり返されるだけで、妊娠の疑いは明示されない。しかしこれ以前に妙子が赤痢にかかつた際、衰えた妙子の姿を見た幸子は「花柳病か何かの病毒が潜んでいる」「何となく墮落した階級の女の肌を連想させる」という印象を持っている。さらに幸子と雪子は妙子の「清い交際」に疑いを持つてゐることも語られる。また、妙子がアパートを借りており、そこに宿泊することも度々示されており、妙子の妊娠を疑う要素はいくつも散りばめられている。しかし語り手はそのことには触れず、その時点では事実を羅列するのみである。なぜなら語り手は幸子を視点人物とし、彼女と情報共有しているからである。

語り手が幸子が情報を共有している以上、「細雪」においては、妙子に限らず様々な情報は幸子に認知されなければ公開されない構造になっている。つまり、幸子さえ妙子の変化に気づくことが可能であるならば、妙子の妊娠は、妙子の衝撃的な「告白」を待つまでもなく予測されうる。そしてまた、語り手が幸子と情報を共有しなければ、妙子の妊娠発覚は、読者に違つた印象を与えることも可能なのである。

よつて問題になるのは幸子の妙子に対する鈍感さと、そのような幸子と情報を共有する語り手の存在である。ここではまず、幸子の問題から考えていく。そもそも幸子は、姉妹の中で一番妙子を疑ってしかるべき人物である。東京にいる鶴子や雪子と違い、姉妹で最も妙子の近くにいるのが幸子であり、妙子の恋愛事情に一番精通しているのも幸子である。しかし幸子は妙子の変化に気づかない。その鈍さは幸子自身に起因しているだろう。幸子の雪子や妙子に対する態度には、大前提として彼女達に対する肯定がある。雪子の電話嫌いを、雪子らしいと判断してしまうのもそれであるし、妙子に關しても勘当しきれず許してしまうのもそれである。これらの妹たちに対する一種樂觀的な肯定の根底には、幸子自身の自己肯定がある。「蒔岡」という家の中で守られ、育まれた習慣や姉妹たちを絶対的に肯定する気持ちがある幸子にはある。毎年恒例の花見を重要視する態度や、前述したような妹たちの欠点を許容する態度は、「蒔岡」が全盛だったころに固執し、そこにアイデンティティを見出す幸子の姿が感じられる。ここでも、妙子が（つまりは「蒔岡」の娘が）妊娠するはずない、と言う意識、もしくはそんなことを知りたくないという無意識が幸子を鈍感にさせている。そしてその幸子の鈍感さをそのまま自らの語りにも反映させているのが他でもなく語り手なのである。

三、雪子像・妙子像と語り手の問題

語り手がこのような幸子を視点人物として選ぶ背景には、雪子と妙子に対する語り手の意図的な人物像形成の目的があったと見てよいだ

ろう。なぜならば、幸子との情報共有の影響を誰よりも受けるのは、各エピソードの主役である雪子と妙子と考えられるからである。

雪子と妙子についてはこれまでも様々な考察がなされてきた。幸子とほぼ同じ価値観を持つとされる雪子とは対照的に、妙子への評価は分かれていると言える。長谷川三千子⁽¹²⁾は「妙子だけがいつまでの「子供」である」とし、「妙子が次々と恋愛問題をおこしていくのは、言ひ換へれば大人になることからにげつづけてゐるのだとも言へる」と妙子を分析する。一方で東郷克美⁽¹³⁾は妙子を「その行動において、幸子の主宰する蒔岡家の美的秩序に、つねに暗影を投げかけ、混乱をもたらす存在」であるとし、「妙子はずねに家の外に出て自立しようとする傾向をもっている」と、妙子を制度に対抗する存在として評価する立場に立つ。

長谷川と東郷の妙子に対する評価は全く違っているが、妙子を幸子や雪子を中心とする「蒔岡」の「異端児」とする点では一致している。このような「異端児」としての妙子像の形成には、幸子と情報を共有している語り手の影響がある。なぜなら、雪子についても十分に「異端児」性が見て取れるからである。例えば雪子は、本来居るべきはずの本家にめつたに帰らない。また義兄・辰夫が斡旋する縁談を土壇場で破談にしてしまう。幸子が雪子について「雪子ちゃんは黙ってても自分の思うこと徹かなん人やわ」（上二十九）と言うように、雪子も雪子の考えで行動し、我を通してしているのである。その雪子が妙子より幸子の同情を集め、「反対に妙子が「異端児」として扱われる根拠は、結局は幸子の判断でしかない。より同情を集める雪子は、たまに幸子の意に副う形で行動しているに過ぎないのである。それにも

関わらず妙子のみが「異端児」とされるのは、語り手が幸子を視点人物にしているためなのである。

語り手は幸子を視点人物に選び、情報を共有する。それはつまり語り手が幸子を利用し、物語で公開される情報に制御をかけているということでもある。語り手は幸子の「感性」だけでなく鈍感さをも利用する。「細雪」の語り手が強い統率力を持っているということは先に述べたが、この語り手は登場人物たちの会話を再現する場合にのみ統率力を発揮するのではない。語り手は各エピソードの傍観者である幸子をあえて視点人物に選ぶことで、雪子と妙子を物語内で対照的な人物として浮かび上がらせているのである。物語内では語り手による意図的な人物像形成が行われている。「細雪」の語り手はその語り力で、物語全体に影響を及ぼしているのである。

と、ここで気づくのは、このような人物像形成が、一人称小説である「痴人の愛」「盲目物語」や、佐助によって作られた「鴟屋春琴伝」を元にしてるとされる「春琴抄」などと類似している点である。「細雪」以前に発表されたこれら作品は、ある特定の登場人物の視点から語ることに、語られる側であるナオミや春琴たちの像が意図的に作り上げられていくという構造になっている。このような構造は、語り手を相対化することにより、作り上げられた人物像を転換させることが可能である。実際、東郷の妙子評は、そのような方法によって幸子や語り手を相対化することで浮かび上がるものである。また、語り手を相対化した前後の人物像を比較することにより、語り手の意図を透かし見ることもできる。「細雪」においても、幸子と語り手の関係、そしてそれによる雪子像・妙子像という点を見ていくと、このような

構造が確認できるわけである。

しかし、だからと言って「細雪」の場合は、語りの目的の全てをこれに還元するわけにはいかない。そこには「細雪」と前掲したような作品との決定的な相違点が存在する。

非常に大雑把に言えば、「痴人の愛」や「春琴抄」などは、譲治や佐助にとつて絶対的な女性を作り上げ、他人の介入を許さない愛の世界を表現することに目的があった。この点において一人称という語り方法は絶大な効果があったと言えるのだが、「細雪」はそのような「女性崇拜」を一番の目的としているとは考えられない。「細雪」が谷崎お得意の一人称小説ではなく、三人称で書かれた背景もそこにある。

例えば妙子については次のような描写がある。

「きつとやなあ、こいさん。——きつとアパート住まひするなあ？」

と幸子はほつとしたやうに云つた。

(中略)

「松濤アパートは？」

「夙川でない所にしたけれど、此れから行つて、今日のうちに極めて来るわ」

二人の姉が出て行つたあとで、妙子はひとり肘掛窓に腰掛けて晴れた晩秋の空を見上げてゐたが、いつの間にか彼女の頬にも涙が糸を引き始めてゐた。

(下十一)

これは妙子の勘当が決定的となり、家を出て行く相談を幸子と雪子とした後の妙子の描写である。幸子の前では自身の勘当騒ぎに無表情であつた妙子が涙を流している。ここに幸子の視点は介在しておらず、語り手の視点だけが妙子を捉えている。もし幸子の視点が介在するならば、幸子による妙子の内面への推測が述べられることとなるであろう。幸子が介在しないために妙子の内面が描写されることはないが、ここにおいて読者は幸子の視点を離れた妙子を垣間見ることとなる。この妙子の涙を見ることで、読者は一見凶々しく自分勝手に振舞う妙子の、奥深くにある苦悩や悲しみを考えることになるのである。また、雪子に関しては次のような描写が見られる。

幸子は身支度をしてしまふと、そんならちよつと、晩の御飯までに帰つて来るよつてに、と云ひ置いてひとりで出かけたが、雪子は姉が脱ぎ捨てゝ行つた不断着を衣紋竹にかけ、帯や帯締をひと纏めにして片寄せてから、なほ暫くは手すりに靠れて庭を見てゐた。

(中略)

西洋では、赤ん坊は鶴が咬へて来て木の枝に置いて行くのだと云ふ風に子供に教へると聞いてゐたのに、矢張お腹から生まれることを知つてゐるのだなと思ひながら、雪子はひとり微笑まじさを泳へて、少女達のすることをいつ迄もこつそりと見守つてゐた。

(上十八)

これは庭で遊ぶ悦子とローゼマリーを見守る雪子の描写である。ここにも幸子の視点は介在しておらず、語り手の視点のみが雪子を見ている。この直前の場面では雪子は幸子とお見合いの話をしている。なかなか決まらない縁談という、重い話題の後に一人残された雪子は、庭の自然と子供達の無邪気さに癒されている。悦子が雪子に癒しをもたらし存在であるということは既に指摘があるが、ここで注目されるのは、幸子の視点からは自身の縁談に他人事のように振舞っているかに見える雪子とは違つた姿である。先の妙子の場合と同様、雪子の縁談に対する心理は描かれぬが、幸子の視点を離れた雪子を窺い知ることができるのである。

このような視点人物を離れた描写は「痴人の愛」などの一人称小説ではありえなかつた描写であり、「細雪」の女性達がナオミや春琴などとは違つた扱われ方をしていことが分かる。逆に言えば、雪子や妙子はナオミや春琴のような崇拜される対象としての資格が欠けているということにもなる。幸子を視点人物に設定したことで、雪子と妙子はある程度偏つた描写がされるが、反対に一人称で無い限り、ある程度しか偏つた描写はされないのである。

四、まとめ―「細雪」の語りとは―

以上の考察で分かるのは、「細雪」が谷崎の「女性崇拜」の作品群とは違つた、異色の存在であるということである。「細雪」は「源氏物語」の現代語訳を除けば、谷崎最大の長編である。しかしその内実

は、それまでの作品で見られたような理想の女性像の追求とは異なり、ただ語ることに執着している。そして、その事実は「語られる」人物である雪子や妙子の人物像を見ることにより、逆説的に浮かび上がる。本稿の最初に、「細雪」には強い統率力を持つ語り手が存在すると述べた。三人称的な立場でありながら、一人称的な表現を自在に操る語り手。幸子という視点人物を持ちながらも、時にその視点を離れ、そしてまた戻ってくる語り手。そのような自在な語りこそが「細雪」における最大の目的であり、「細雪」の突出した個性なのである。

*テキストは『谷崎潤一郎全集第十五巻』（昭和四十三年十二月 中央公論社）を使用し、旧漢字は新字体に改めた。

- 注 (1) 中村真一郎「谷崎と『細雪』」（『文芸』昭和二十五年五月）『日本文学研究資料叢書 谷崎潤一郎』昭和四十七年十月十日 有精堂
- (2) 東郷克美「『細雪』 試論―妙子の物語あるいは病気の意味―」（『日本文学』昭和六十年二月号）『日本文学研究資料新集18 谷崎潤一郎・物語の方法』平成二年一月十日 有精堂
- (3) 平野芳信「『細雪』の〈語り〉―近代的手法としての物語―」（『山梨英和短期大学紀要』第24号 平成十二年十二月）
- (4) 佐藤淳一「『生活定式』と美意識―谷崎潤一郎『細雪』の表現形式の分析から―」（『国語と国文学』81・7 平成十六年七月）
- (5) 生島遠一「『細雪』問答」（『中央公論』昭和二十四年二月）
- (6) 山本健吉「『細雪』の褒貶」（『群像』昭和二十五年十一月）『日本文学研究資料叢書 谷崎潤一郎』昭和四十七年十月十日 有精堂
- (7) 注(3) 参照
- (8) ロナルド・ウォード著、田部滋・本名信行監訳『社会言語学入門』（平成六年四月 リーベル出版）

- (9) ジェラール・ジュネット著、花輪光・和泉涼一訳『物語のディスクール』（昭和六十年九月 書肆風の薔薇）
- (10) 注(3) 参照
- (11) 注(2) 参照
- (12) 長谷川三千子「やまと」ところと『細雪』（『海』昭和五十六年二月）
- (13) 注(2) 参照
- (14) 小樽耕二「『細雪』―悦子を中心に―」（『都大論究』33号 平成八年六月）

(たかま ふみか)